『軍国主義という病がひそむ国　2』　　2025 年 11 月 03 日

保阪正康氏の『軍国主義という病がひそむ国』の 23 年と 22 年の講演は、ロシアのウクライナ侵攻が起こった時だけに、この問題に多くのスペースを費やしている。講演に触発された私の思いを重ねて書きたい。ロシアのウクライナ侵攻を聞いた時、私は、21 世紀の出来事なのかと疑った。帝国主義時代の領地拡張という最も野蛮な戦争と同じだと思ったからである。保阪氏は、ウクライナ侵攻は、日本による中国大陸侵略、ヒトラーによるポーランド侵攻と、全てが一緒だとは言えないが、類似性があると指摘しておかなければならない。しかし、プーチンの野望のための不正義な侵略を「悪」と見なし、侵略を受けたウクライナを「善」と見なす構図はある程度当たっているが、短絡的な二元論では捉えられないと言う。プーチンにすれば、NATO（北大西洋条約機構）が東欧を超えて、隣国まで入って来たという裏切られた思いもある。また、1941 年の独ソ戦でドイツがソ連領内に入って来た時､ウクライナはソ連の支配から離脱するため､ナチスに加担した人たちがいた。百％「善悪二元論」が正しいとは言えないと分析している。しかし、私は、NATO は侵略に対して共同の防衛をするという条約で、他国を侵略する、ましてロシアを攻撃する意図などは全くなく、ロシアの被害者意識は過剰で、ウクライナをロシア化する目的以外にないと思っている。ウクライナは NATO の軍事支援を唯一の頼りに、防戦一方である。NATO の支援は非力で、それは、NATO 諸国は戦争がないものと、軍備の備えが十分ではないことが分かった。軍備拡張より、備えなくてもよい世界のほうが、私は、圧倒的に好きだ。

保阪氏は、ロシア・ウクライナ戦争は、①徹底的に消耗戦、持久戦に入って戦争を長引かせるか、②ロシアが総軍事力をつぎ込み、ウクライナを制圧するかの二つしかないと言う。仮にロシアが制圧し、戦争に勝っても、ウクライナ人は 100 年、200 年が過ぎようとも、ロシア人を許せないし、抵抗するでしょう。歴史的に勝ったと言える状態にはならない。だから、政治の延長で戦争を選択すると、それ自体でもう敗北である。戦争を選ばない、21 世紀の新しい戦争論を作っていかなければならない。これを作るためには、一番いい環境にあるのは日本ではないかと保阪氏は言う。全く同感である。日本は、80 年間、戦争を起こさず、戦死者を一人も出さなかった。これは、誇るべきことで、戦争を回避、阻止する発言ができるのではないか。

私は、イスラエルのパレスチナ人への非人間的な攻撃に怒り心頭である。ハマスを解体させることはできないし、パレスチナ人をショア（全滅）することなど、できっこない。パレスチナ人はイスラエル人に対し、何世紀にも渡って、恨みと怒りと敵愾心を燃やし続けるだろう。今日の戦争に勝者はない。残酷な殺傷と無益な文化、文明の破壊、膨大なエネルギーの消耗でしかない。戦争に費やすお金を地球温暖化阻止のために用いる時ではないか。保阪氏の 21 世紀の新しい軍事論（平和論）を、私は、そのように受け止めた。

ドイツのメルケル元首相は､プーチンをあまり信用せず｢妄想に囚われている指導者だ｣と、かなり危険視していた。米国のオルブライト国務長官もプーチンと会った際に、この人は嘘ばかり、自分が侵略したにもかかわらず、侵略されたウクライナが悪いと平気でいう指導者だと認識している。プーチンの非人間性を見抜いている指導者たちは、国際社会で発言することによって、国際社会の市民化が広がるのではないかと、指摘している。日本が、ロシアの侵略を見て、単純に軍備増強を訴えるのは何の答えにもならない。米国に追従するだけではなく、ウクライナ侵略を肌身で実感しながら、国際社会の中で発言権を強めていく時代になって欲しいと、講演を結んでいる。